

近江屋藤兵衛が死んだ。

本所駒止橋の上で、雨上がりの天を仰ぎ、冷たくなっているのが見つかった。

その知らせを、彦次は湯が煮えたぎる釜の前で耳にした。

ちよつとの間、頭のなかで様々な思いが入り乱れ、彦次は仕事を忘れ、今いる場所を忘れた。上げざるを手に、湯気で顔を濡らしていた。

おやじの源助にしたか膝を蹴り上げられて、ようやく我に返った。目を上げる。狭い店にひしめいている客たちの話し声を、また聞き取ることができるようになった。

「財布を盗られていたそうだから、まあ、おいはぎだろうな」

「近江屋もおいばれたってことよ」

彦次は仕事を続けた。ぬかりなく手を動かし、熱湯のなかから蕎麦をすくい上げ、面水にあててひきしめる。だが、心は客の話のほうへ傾いていた。

「なんでも頭の後ろにでっかい傷があったそうじゃねえか。もの盗りにしても、ひでえこと

をするもんだ」

「出し抜けにやられて、何も感じなかったんじゃねえのかな。なまんだぶ、なまんだぶ」

あの藤兵衛に、念仏が通じるかな……。ふねから新しい蕎麦を一つ二つ、ほぐし入れて、彦次は思った。

「おめえら、何をとんちきな話をしてやがるんだよ」

ひそめた調子の、別の声が割って入った。

「あれはただのもの盗りじゃねえ。知らねえのかい？」

興味をそらされたほかの客たちのつぶやきが、いつせいにわき起こった。彦次は目を見開いた。客たちの声はみな、湯気の向こうから漂い出てくるように聞こえた。

「近江屋じゃ、そら、一人娘のお美津がよお、藤兵衛としようちゅう、そりやあひひでえ喧嘩をしていたそうなんだ」

「娘がかい？」

「そうよ。もともと、藤兵衛とお美津は、実の親子のくせに、まるで水と油の気性だったろう。だからよ……」

「娘がやったって、そう言うのかい？」

さらに低い声がささやいた。

「回向院の茂七は、どうやらそうにらんでいるらしいぜ」

回向院の茂七とは、本所一帯を仕切っている古顔の岡っ引きである。
(ちがう……)

ちがう。ちがう。そんなはずはない。それこそんでもない間違いだ。心のなかで叫びながら、彦次は目を閉じた。その目の奥に、幼かった頃のお美津の白い顔が浮かんできた。そして、その華奢な手のなかで揺れている、駒止橋の片葉の芦の葉が……。

近江屋は、藤兵衛が一代で築き上げた店である。彼は旗揚げのころから、巷になじみ深いなれ寿司や箱寿司ではなく、その当時はやつと出始めたばかりだった握り寿司だけを売り物にしたり、ずばずばと思いついた商いをしてきた。それが当たって、今では、本所深川界わいはおろか、朱引の内でのこの店の名を知らない者はないだろう。

だから、屋号よりもむしろ、「藤兵衛寿司」と言ったほうが話が早いかもしれない。酢飯には米どころの越後から特に買いつけた米だけを使う。魚も吟味して、藤兵衛寿司は口に入れてもまだびんと跳ねるようだ、と評判をとった。

それだけに、藤兵衛の葬儀は盛大なものだった。

忙しい商いの合間に、源助ににらまれながら、彦次は何とか抜け出して、近江屋に出かけた。人の頭の波の向こうに、場違いなほどに明るく灯がともっている。彦次はふと、お美津の祝言のときも、きつとこんな騒ぎだったにちがいないと思った。

そのお美津の顔を、遠くからではあるが、ちらと見かけることができた。

お美津は父親の葬儀の場でも美しかった。白い頬にろうそくが照り返している。彦次の心にある少女の面影を残しているのは、そのふつくらとした頬と、秋の木の実のような黒い瞳だけだ。人の妻になったことで身に付いた落ち着きが、顎を引き、背を伸ばして座っているお美津の細い身体に、淡い色香を添えていた。

その後ろに、狭い肩をなおすぼめるようにして、お美津の夫が座っていた。一目見ただけで、かれはお美津の夫なのではなく、単に近江屋の婿なのだと思ってしまうような、遠慮がちな姿だった。

彦次は焼香をすることはなかった。人の輪の一番外で、ただお美津を見つめ、それから低く、頭を下げた。俺は藤兵衛の弔いに来たのではない。どんなにそりが合わなかったとはいえ、実の父を亡くしたお美津お嬢さんを見舞いに来たのだ。そう思っていた。

くびすを返して戻ろうとしたとき、一間と離れていないところで、向かいの呉服屋の立看板に隠れるようにしている人影を見つけた。

十七、八の若い娘である。色褪せた着物の肩のあたりが薄い。心持ち頭を下げ、合掌しながらぼろぼろと涙をこぼしている。荒れたその手のなかに、安物の数珠があった。数珠に付いた紫の房が、娘が涙をこぼすたびに小刻みに震えるのが見えた。

娘が手の甲で頬をぬぐったとき、彦次と視線があった。彦次が声をかけようとするよりも

先に、くると身をひるがえすと、人込みのなかに紛れていつてしまった。

取り残された彦次は、しばらくそこにたたずんでいた。ふと足もとを見ると、娘の立っていたあたりに、細かな木の削りかすのようなものが落ちている。

かがんで拾い上げ、指先でつまんでみた。桐桐の香りがした。

彦次は頭をめぐらせ、娘の消えた方向をながめた。

その夜、店をしまってから、珍しいことに源助が、彦次に、湯に行こうと声をかけた。肩に手拭てぬぐいを引っ掛けて、早足で歩いていく源助のあとについていきながら、彦次はぼんやりとしていた。

「なあ、彦次」

急に声をかけられて、彦次は立ち止まった。源助も足を止めて振り返っていた。

「おめえ今日、わざわざ大川を越えて近江屋藤兵衛の葬式に出向いていったそうだな」

「勝手なことをしまして、すいません」

「それはかまわねえんだ。そんなことを言ってるんじゃないねえ」

源助は身体の向きをかえ、顎の先でつい先の明りのともる店を指した。

「ちよいとそのへんでいっばいどうだ。湯に行こうというのは口実でな、おめえと話をしたかったのよ」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。